

乳歯列期から混合歯列期にかけての咬合誘導

中尾 哲之（なかお小児歯科・福岡市）

小児歯科において咬合誘導を考える場合、乳歯列期から永久歯列完成までの長いスパンで観ていかねばならないと思います。その間、色々と複雑な変化が歯、歯列に現れて来るわけですが、形態的もしくは機能的に好ましい状態を維持していくことが必要だと考えられます。また、もしそれらのことを障害する事態が生じた場合、出来るだけ早い機会にそれを改善もしくは抑制し、正常な発育のルールにもどしてあげる努力をすることになるかと思えます。但し、小児の精神的発育を考慮に入れ、無理のない時期にアプローチすべきではないでしょうか。そして、状態が改善されたならば経過観察を続け、また別の障害が生じたら、それに対処するといったことを繰り返して、永久歯列完成まで管理していきたいと思っています。最終的にスペース・リダクションとかマルチブラケットによりアライメントを計らねばならないケースは矯正医に紹介することになっています。

さて、歯列の成長発育の中でも乳歯列から混合歯列に移行する際には、異所萌出、正中離開、前歯部の叢生、1歯、もしくは2歯の捻転となって現れて来るわけですが、その内、一部は一過性であり、経過観察で改善されるものもありますが多くは手を加えなければ治らないものです。また、以上述べてきたこと以外にも乳歯列期の重篤なう蝕によるスペースの短縮化、口腔悪習癖による咬合異常等も混合歯列期にかけての問題点になるかと思われます。これら種々の内容を有している症例について本院で経験したものを紹介し、皆様と一緒に咬合誘導について考えていきたいと思っています。